S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション

１．近代の思想状況と自然神学

１－５：モルトマン　5/7

２．形而上学批判と形而上学再構築

２－１：ハイデッガー・解釈学　6/4, 11

２－２：ホワイトヘッド・プロセス神学　6/25, 7/2

３．自然神学の新しい動向

３－１：クレイトン　7/9

３－２：マクグラス　7/16

３－３：意味論・言語論　7/23

Exkurs

人文学の新しい可能性――キリスト教学の視点より　5/14, 21

科学技術の神学にむけて――現代キリスト教思想の文脈より　5/21, 28

＜前回＞啓蒙主義的知と近代神学

（１）啓蒙的近代とその意義

１．近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス

２．カント「啓蒙とは何か」(『啓蒙とは何か』岩波文庫)

３．啓蒙主義とは？　（シャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社）

・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」

・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

４．啓蒙主義の思想的特徴：

ティリッヒ『キリスト教思想史II』（別巻三）白水社。：自律、理性、自然、調和　→

市民としての人間、合理的宗教、コモンセンスの道徳、主観的感情。

↓

理神論

（２）理神論＝啓蒙主義的宗教論

５．17 ～ 18 世紀、イギリスからフランス・ドイツへ。国家や教派を越えた広範な影響力

６．理神論、キリスト教の合理化の試み　→　キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。

８．スピノザ(1632-77)『神学・政治論――聖書の批判と言論の自由　上下』岩波文庫。

（３）教養市民層の宗教

10. 啓蒙的近代の宗教状況。

ヒュームの自然宗教（人間の自然本性に基づく合理的宗教）論の描く世界

クレアンテス：理神論者、フィロ：懐疑論者、デメア：有神論者

11. 啓蒙主義の多様性：イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究

近代ドイツにおける宗教の分化：世俗化の一つの形

ルター派／カトリック

教養市民の宗教／農民の世界／都市労働者の世界

（４）啓蒙思想から 19 世紀にいたる生命論の自然神学―レイとペイリーの場合―

14. レイ『創造のみ業に顕れた神の知恵』(1691)

15. レイの自然神学の意義と方法

「神性の信念はすべての宗教 ── 宗教とは敬虔に神を礼拝すること、あるいは神に仕えそして礼拝するという心の傾向性に他ならない ── の基盤である。なぜなら、神へと来る者は神が存在することを信じなければならないからである。この主要な論点を十分な説得性をもって確固たる仕方で解決し確立することは、きわめて重要な事柄である。さて、これは自然の光と創造のみ業とから引き出された論証によって論証されねばならない。……自然の光によって、人間は神性の存在を十分に確信するのである。実にこの根本的真理についての超自然的論証は存在しているが、しかし、それはすべての人間あるいは時代に共通ではなく、無神論的人間によって難癖を付けられ除外されがちなのである。」（Ray, pp.iv-v）

16. 理論的に武装した無神論者を合理的に（自然の光からの論証にとって）論駁し、キリスト教的宗教の基盤である神の存在を説得的に論証すること。もちろん、こうした自然神学における合理的論証は、聖書に与えられた神の啓示と矛盾するものではなく、聖書も自然神学も、こうした神の御業の讃美において同じ目的を有しているのである。「恒星がかくも夥しい数の太陽であるというこの仮説は神の偉大さと荘厳さによりかなっているように思われる。」（ibid., p.3）

21. レイの議論のポイント

レイの自然神学は、最初に確認した無神論的な仮説の取り扱いからもわかるように、ニュートン主義の自然神学に属するものと言える。また、天体や生命のない被造物にも一定の頁が割かれており、宇宙の全体から人間へという議論の枠組みが確認できる。

研究者も指摘するように、レイの議論においては、人間の身体について、とくに目と視覚との分析が詳細になされている点に特徴がある。もちろん、人間の目の仕掛け(contrivance)の完全さや巧みさを論じるということの目的も、「我々の身体の完全さと完璧さに対して全能の神に感謝」(ibid., p.223)することにあったことは言うまでもないであろう。

22. ペイリーの『自然神学』：ニュートン主義の自然神学の発展の到達点あるいは集大成

23. デザインを論じる場の移行

「天文学についてのわたしの意見は常に次のようなものである。すなわち、わたしは、天文学は知性的な創造者の作用を証明するのに最適の手段ではなく、またこれが証明された場合には、天文学は、他のあらゆる諸科学以上に神の働きの壮大さを示すと考える。一度説得された精神を、天文学は他のどんな学科が与えるものよりも、もっと卓越した神性の見方へと引き上げるのである。しかし、天文学は他のいくつかの学科と同様に、論証という目的にはあまり適していない。我々は、天体の構成を吟味するための手段を欠いているのである。天体のきわめて単純な見かけが、吟味の手段にとって不利になっているのである。我々が見るのは、明るい点、輝く領域、そしてそれらを照らす光を反射する天空の相にすぎない。さて、我々は諸部分の関係、傾向、対応からデザインを推論する。それゆえ、この種類の論証にふさわしいテーマを提示するには、一定程度の複雑さが必要になる。しかし、天体は、おそらく土星の輪の場合を例外として、諸部分から複合されたものとしては我々の観察に現れないのである。」（ibid., pp.263-264）

26. 諸科学における聖俗革命の進み方の多様性：天文学・物理学→生物学→心理学

（５）進化論とキリスト教

書評：フランシスコ・J・アヤラ　『キリスト教は進化論と共存できるか？　ダーウィンと知的設計』（藤井清久訳）、教文館、2008年。

S. Ashina

１．近代の思想状況と自然神学
１―４：ティリッヒの科学論

（1）近代の弁証神学とティリッヒの科学論

１．宗教改革と宗教戦争を経た西欧の近代社会において、キリスト教は様々な批判に遭遇してきた。一方で、キリスト教は、近代的自律理性の合理精神によって、その合理的根拠をめぐる根本的な批判を受け、また他方、キリスト教が理想社会の形成を可能にするかについても、重大な疑いを投げかけられることになる。

２．ティリッヒ

①近代人・教養市民層におけるキリスト教的伝統への批判に対して、学問論・科学論のレベルで応答すること。

②労働者階級のキリスト教・キリスト教世界への批判に対して、社会改革への参与などを通して実践的レベルにおいて応答すること。

３．自由主義神学：近代のキリスト教批判に対して、学問論的に、合理的に答え、そのような仕方で、科学的なキリスト教神学の形成を目指した。その際の基本姿勢は、19 世紀の科学一般と同一の科学性を持つものとして、神学の科学性を明確化することである。

新カント学派の科学論：自然科学と精神科学（歴史学など）との間で、それぞれの科学としての基本性格が内容的に区別。

自由主義神学：精神科学の科学性の意味で、神学の科学性。神学の科学性として問題にされるのは、哲学や歴史学との関係性。

シュライアマハー『信仰論』：倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題（Lehnsätze）によって、教義学や教会の概念を定式化。

４．トレルチ「宗教史学派の教義学」

「教義学は、ここで詳しくは言及できない倫理学と共に、実践神学の一部なのであり、しかも、最も重要な部分である。他方、宗教哲学とキリスト教史は純粋に学問的な性格を持っている。」

５．弁証法神学・バルト「神の言葉の神学」：近代的な合理性へ過剰適応し神学としての固有性を喪失した 19 世紀自由主義神学を批判、キリスト教神学の固有性を再建する試み。

トランス：バルトの教義学の方法論を確立した「アンセルムス書」は、アインシュタインの科学的実在論に匹敵する神学の科学性を確立したものとして評価できる。

「要するに、それは合理性と方法という言葉の両方の意味におけるラチオ（ratio）の問題、つまり、科学的な神学、すなわち教義学の問題なのである。この問題は、バルトが 1930 年の夏、アンセルムス研究において直面したものである。『知解を求める信仰』の著述と出版（その翌年）がバルトの思惟の決定的な転換点を表していることは疑いの余地がない。なぜなら、それは弁証法的思惟から教会教義学への進展の最後の地点を記しているからである。」（Torrance, 1962, p.182）

６．ティリッヒの学問論・科学論：19 世紀と 20 世紀とがいわば交差する地点。「学の体系論」

（2）ティリッヒの弁証神学の形成過程

７．ティリッヒの最初期の弁証神学の構想（＝弁証神学プラン）：ベルリンでの副説教師時代の『教会弁証学』（1913 年）。このプランが具体化されるのは、第一世界大戦の衝撃的体験を経た『文化の神学の理念について』（1919 年）。1919 年の論考から始まって、23 年の『諸学の体系』を頂点とする弁証神学の科学論の形成過程。

１．「文化の神学」（Kulturtheologie）構想

1)　宗教と文化の関係の再構築

８．「文化の神学」：近代プロテスタンティズムが直面した宗教と文化の分裂状況を克服するために、宗教と文化を新たな仕方で総合することを目指している。

cf.　二重真理（近代の自律的理性に合致した真理とキリスト教的伝統の信仰的真理）

「この二重性はどんなことがあっても廃棄されねばならない。それは、意識にのぼるやいなや耐え難いものとなる。なぜなら、それは意識を破壊するからである」（Tillich,　1919, S.74）。

2)「文化の神学」の三つの課題：哲学／思想史（精神史）／体系論（規範形成）

「文化の神学」構想は、次の三つの課題によって構成されている。

「文化の神学に対しては、文化体系的な諸学一般の有する、とりわけ体系的な宗教学の有する三重性に対応して、次の三つの課題が課せられる。すなわち、1.文化の一般的な宗教的分析、2.文化の宗教的類型論と歴史哲学、3.文化の具体的で宗教的な体系化、である。」（ibid., S.76）

２．『ベルリン講義』

「文化の神学」構想が展開されるプロセスについては、同時期にベルリン大学における私講師として行われた講義（『ベルリン講義』）によって、具体的に確認することができる。しかも、この『ベルリン講義』では、「文化の神学」だけでなく、宗教社会主義論をも包括した弁証法神学プログラム全体が扱われている。つまり、この講義の第一講義「キリスト教と現代の社会問題」（1919 年の夏学期）では、トレルチの『社会教説』と正面から取り組みながら、社会理論や国家論といった宗教社会主義の基礎に関わる議論を展開している。こうした社会理論を神学や宗教哲学をも含めた理論的枠組みの中に位置づける試みが、第二講義「神学のエンチクロペディーと宗教学」（1920 年冬学期）、第三講義「宗教と文化、精神的生における宗教の位置づけ」（1920 年冬学期）、第四講義「宗教哲学」（1920 年夏学期）という一連の講義であり、その成果は 1925 年までに論文や著書として発表された。

1)　第二講義「神学のエンチクロペディーと宗教学」

2)　第三講義「宗教と文化、精神的生における宗教の位置づけ」

3)　第四講義「宗教哲学」

３．弁証神学プログラムの全容

＜文化の神学＞

構想：『文化の神学の理念について』（1919 年）

基礎論（学の体系論・科学論）：『諸学の体系』（1923 年）

宗教学の体系（宗教哲学／宗教史・宗教類型論／規範的宗教学＝教義学）：

『ベルリン講義』（1919/20 年）、『宗教哲学』（1925 年）、『マールブルグ講義』（1925 年）

（３）１９２０年代の体系論と神学の科学性

１．学の体系論の可能性

９．ティリッヒは、『諸学の体系』において、1920年代の科学論の全体像を提示している。

「しかるに、認識そのものが、認識の体系を構築するように要求し、空虚な形式主義という批判に反論するのである。」（Tillich, 1923, S.116）
「諸学の体系は精神諸機能の体系の表現となり、また精神の構造は、諸学が諸対象を見出し境界づける際の多様な方向性から認識可能になる。」（ibid., S.117）

２．体系の内実と形式

10．認識主観のいわば深層へ。議論のポイントは、「形式－内実」（Form-Gehalt）という対概念、とくに内実概念。
「現実の体系が構築されるところにおいては、形式の内に、単なる形式以上のものが顕わになる。この体系の生きた力が体系の内実であり、体系の創造的な立場、根源的直観なのである。あらゆる体系は、それを根拠づけ構築する原理によって活力が与えられている。しかし、すべての究極原理は究極的な現実直観、根源的な生の態度の表現である。内実が、諸学の形式的体系を通して、あらゆる瞬間に現れ出る。それは形而上学的であり、すなわち個々の形式や諸形式全体を超えている。……形而上学的ものは体系の生きた力、意味、血液なのである。」（ibid., S.118）

３．認識の原理から、学の体系へ

11．心的内容などの実体化（自然的態度）を括弧に入れ、純粋意識の領野における志向相関を直観的に確保しつつ、記述することによって、認識を構成する本質的要素として取り出されたのが、思惟と存在である。これら二つに第三の要素として精神を加えた三つの原理――「我々は思惟、存在、精神の三つのものを諸学の体系の基礎」（ibid., S.121）とする――から、諸学の体系の全体像（思惟科学、存在科学、精神科学）。

①思惟科学、ないしは観念的な諸科学：論理学、数学、現象学
②存在科学、ないしは実在的な諸科学：実在の三つの種類としての法則、形態、系列
　1.法則科学：数理物理学、力学、動力学、化学、鉱物学
　2.形態科学：有機的諸科学：生物学、心理学、社会学
　　技術的諸科学：医学、教育学、社会経済学、政治学、統計学
　3.系列科学：政治史、伝記、文化史、人類学、記述民族学、言語学、文献学
③精神科学、ないしは規範的な諸科学

４．神学とはいかなる科学か

神学は、諸学の体系の内部において、次の二重の仕方によって規定され、それぞれに応じた科学性が問題となる。まず、神学は精神科学に属する一科学である。精神科学の一つとして、高度に専門化された学科であって、それ固有の専門領域と科学性を有している。諸学の体系内の位置に応じた特殊性と科学性を持つ点で、神学は他の諸科学と同等であり、諸科学との体系的な整合性ぬきに、神学の科学性は理解できない。具体的に言えば、神学は宗教を認識対象とする宗教哲学や宗教史とともに宗教学を構成し、シュライアマハーが借用命題として論じたように、隣接する諸学科との緊密な関係性において一つの科学として存立するのである。神学は、学の体系内の周辺関連諸学科との密接な関わりの内に位置づけられており、この連関の外においては、神学の科学性は保証できない。以上の点は、1920年代の科学論の中心的議論であり、ここでティリッヒは自由主義神学の線で神学の科学性を論じている。

しかし同時に、神学には、神律的という精神的態度が結びつけられている。神学とは神

律的体系学であって、諸学の体系の内実を直接主題化する神律性にこそ、神学と他の諸科学との決定的な相違が認められねばならない。つまり、神学の科学性は、単に諸科学との整合性にのみ見出されるのではなく、諸科学が共通に前提とする諸学の体系の内実との関係性というもう一つ別の基準によって理解されねばならないのである。

（4）後期ティリッヒの科学論と神学

１．「相関の方法」における神学と科学

12. 後期ティリッヒ：『組織神学』（1951 ～ 63 年）の「相関の方法」

問いと答えの相関は、人間の状況とキリスト教のメッセージとを「問い－答え」として相関させることによって、キリスト教のメッセージの真理性や意義を弁証する試み。

「人間の状況の分析は、文化の全領域における人間の創造的な自己解釈によって利用可能とされた素材を用いる。……神学者はキリスト教のメッセージによって与えられる答えとの関係で、これらの素材を組織化するのである。このメッセージに照らして、神学者はたいていの哲学者が行うよりも、透徹した実存の分析を行うかもしれない。それにもかかわらず、それはなおも哲学的分析なのである。実存に含意された問いを展開しつつ、実存を分析することは、哲学的課題である。たとえ、それが神学者によって遂行され、またそれがカルヴァンのような宗教改革者であったとしても、そうなのである。」（Tillich, 1951, 63）

哲学者カルヴァン！

13. 1920 年代の諸学の体系：哲学は独立した一つの学というよりも、精神科学に属する諸学すべての構成要素として考えられており ── 宗教学における宗教哲学、芸術学における芸術哲学など ── 、神学の単に外部にある相関者として考えられていない。

後期ティリッヒ：哲学概念の展開が、神学と哲学との関係理解にも影響を及ぼし、哲学に諸科学に対して、いわば特権的位置を与えるものとなった。

「科学的探究と神学との間の接触点は、科学と神学の両者における哲学的要素のなかにある。それゆえ、神学の特殊な科学に対する関係の問いは、神学と哲学の関係の問いに統合されることになる。」（ibid., 18）

14. 哲学的要素：問いの定式化の側だけではなく、答えの定式化にも関わっており、哲学の位置づけは決して単純ではない。つまり、キリスト教のメッセージを状況の問いに対する答え「として」解釈すること自体、哲学的解釈学的作業であって、キリスト教思想の科学性がこの解釈学的構造において具体化されるという点で、後期ティリッヒの科学論はまさに解釈学的である。

２．相関の可能性と積極的意義

15.「しかしながら、とりわけ宣教神学者の一部における、弁証的方法への不信には、もっと深い理由がある。問いに答えるためには、それを尋ねる人間と共通するものを持たなければならない。いかに漠然としたものであっても、弁証家は共通根拠を前提としている。しかし、宣教神学者は＜神学的循環＞の外部にいる人々とのいかなる共通根拠も否定する傾向にある。……彼らは、個々の場合に、実際に共通根拠と考えられたものが、＜状況＞の根拠であり、その状況に入るとき、神学は自ら自身の根拠を喪失する、ということを論証しようとする。」（Tillich, 1951, 6）

「対立は戦いが行われる共通基盤を前提にする。しかし、神学と哲学の間には共通基盤は存在しない。……哲学的レベルでの対立は、二つの哲学者の間の対立であり、その内一人がたまたま神学者であっただけであり、それは神学と哲学の間の対立ではない。」（ibid., 26）

16. 共通基盤(common basis)と共通根拠(common ground)の区別。
・神学と諸科学の間にも対立は起こりえない。
　神学と哲学の間には両者の対立を可能にする共通基盤が存在しない。現代の創造論者と進化論者との間の論争は、厳密な意味での神学と生物学との対立ではなく、いずれか一方あるいは双方が、本来のあるべきところから逸脱した結果発生した擬似的対立。共通基盤がない。神学、哲学、諸科学が相互に独立的、自律的である。
・神学と哲学との間における対話の成立。
　共通基盤の否定は、問いと答えの相関という対話的関係性の前提である共通根拠の否定ではないからである。
「なぜなら、科学にはもう一つの要素が存在するからである。それは、人間の精神的生の全体に、それゆえ宇宙における人間の自己解釈に、科学が参与していることである。かつて、このような神話論的また形而上学的な言葉における自己解釈から、科学は生まれてきたのである。この発展のどの段階においても、科学はその根拠を完全に捨て去ることはなかった。科学自体が宗教的次元に到達するのは、この点においてである。」（Tillich, 1960, 155）
17. 神学と哲学の対話で問われるのは共通基盤ではなく、「人間の精神的生の全体性」への参与という点での共通根拠。対話とはこの批判的な相互チェックの一つの形態であり、その前提にあるのは、神学も哲学も諸科学も人間存在の全体性に共に参与しているという認識である。共に人間存在あるいは精神的生の全体性への参与しているからこそ互いの区別を超えて対話し、批判し合うことが可能であり、また要求されるのである。たとえば、現代の環境危機という問題状況を共有していることにおいて、神学と諸科学は、それぞれの責任を個別的に果たすだけでなく、全体の視点で対話を行うことが必要になる（責任の連帯性）。

３．科学論の再構築

18. 宗教と科学、キリスト教神学と自然科学との関係：図式的に言えば、「未分化→分化（専門化・内的緊張）→分裂（分離・対立）→ 区別→協力・再統合」という順序で進展。
19. ティリッヒ：対立、寛容（区別）、協力・再統合を、過去、現在、未来と対応。
20. 「宗教と科学」の関係の歴史的理解に基づく、宗教と科学との新しい積極的な関係構築の試み。
「今、これはわたしを最後の地点へと導く。そして、わたしは次のように語ることによって総括したい。宗教、科学、哲学の間の対立の時代は、原理的に過ぎ去った。もっとも、思想のより古い時代に逆戻りしている個々人はまだ存在しているけれども。わたしたちは寛容の時代に生きているのだ。これは決して満足できるものではない。というのも、それは相互に認め合うが結合しないからである。……そこで、われわれは常に再統合を、この場合は、協力を求めている。そして、これが今日可能なのである。これは多くの場所で始まっており、わたしは、それがますます力ある現実になるかもしれないという希望を表明したい。」（Tillich, 1963, 172）

（５）神学的科学論の展望――コミュニケーション合理性における科学論

①対話的状況における合意形成の条件
②対話的状況から、新たな体系構築へ
③対話的状況から神学の再構築へ

＜参考文献＞

Tillich（1919）：Über die Idee einer Theologie der Kultur, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.2, de Gruyter　1990　S.69-85

（1919/20）：Berliner Vorlesungen I (1919-1920), in: *Ergänzungs- und Nachlaßlände zu den Gesammelte Werken* XII, de Gruyter　2001

（1923）：*Das System der Wissenschaften nach Gegenständen und Methoden*, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.1, de Gruyter 1989　S.113-263

（1951）：*Systematic Theology* vol.1, The University of Chicago Press

（1960）：The Relationship Today between Science and Religion, in: J.Mark Thomas(ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer University Press　1989 pp.151-158

（1963）：Religion, Science, and Philosophy, in ibid., pp.159-172

Torrance（1962）：T.F.Torrance, *Karl Barth. An Introduction to His Early Theology 1910-1931*, SCM Press

芦名（1995）：芦名定道　『ティリッヒと弁証神学の挑戦』　創文社